



三遊亭竜楽 落語家

さんゆうてい・りゅうらく 1982年中央大学法学部卒。85年三遊亭円楽に入門、93年真打昇進。日本放送作家協会会員。中央大学では、学員講師として各地で講演を行う。朝日新聞夕刊で「らくごよみ」連載中。



加賀野井秀一 教授

かがのい・しゅういち 1973年中央大学文学部フランス文学科卒。83年中央大学大学院文学研究科仏文学専攻博士後期課程満期退学。98年中央大学理工学部教授就任。専攻はフランス文学、現代思想、言語学。

異文化理解が
幅広い教養人への第一歩

竜楽 私も先生と同じ中央大学出身なんです、私は卒業が昭和57年です。本当は56年のはずだったんですが……。

先生が中央大学で教鞭を執られるきっかけからお聞かせください。

加賀野井 私は、父が新聞記者だったもので、昔はマスコミの人間か外交官にでもなつて実社会の中でガンガン働きたいと思つていたので、大学に入り、学年が進むにつれて、そうでもなくなつてきました。根がオタクであるうえに、自分でやり始めたフランス文学にも次第に興味がわいてきて、いつの間にか、大学院へ行こうと考えるようになったんです。

最初はあまり渡仏するつもりもなかったのですが、大学院に通い始めると、これはフランスに行かねばならないかなということになつてあちらに渡り、2年ほどして帰つてくると、今度は大学で職を得たくなり、非常勤のコマをいただくようになったのです。

しかし、この道だけでは食べていきません。あらゆる副業をしながら、小さなカルチャーセンターで教えて

みたり、TBSの緑山スタジオでタレントの卵たちを教えたり、それも太極拳なんか、まるで文学とは縁のないものを教えて食いつないでおりました。

そのうち突然、私の恩師である丸山圭三郎さんのお引き合わせで就職することができ、ふと気がついてみると大学の人間になつていた。本来どちらの方向に行くかわからなかったのが、偶然にして中央大学に拾つていただいたという感じですよ。

竜楽 ご専門は言語学になるので、

加賀野井 実は、今なにご専門なのか、自分でもよくわからないんです(笑)。もともと仏文の出ではあるんですが、仏文といつても、フランス思想というか、メルロー・ポンティという哲学者のことをずっと調べており、心理学にも手を出していました。ですから、中央大学の修士課程を出て、パリ第八大学に行ったときには哲学科に所属していたんです。そのうえ日本でずっと指導を仰いでいたのがソシュールの丸山圭三郎さんですよ。だから、そこに言語学というのが入ってくる。

それだけではありません。フランスに行つてカルチャーショックを受けるのはあたりまえですが、僕は久しぶりに日本に帰つてきて、かなりひどい逆カルチャーショックを受けてしまいました。つまり自分が生まれ育つた、何も疑問を抱かなかつた日本というのが非常に違和感を持つて見えてきたんですね。「在日日本人」になつたとも言えればいいんですか。そこで、これをつづつてみたらどうかと考えて『日本語の復権』という本を出しました。これがきっかけで、やがて日本語論や異文化コミュニケーション論にも手を出し、今ではもう、朝日カルチャーセンターやNHKで、日本語教員養成講座を10年近くも担当しています。

その後、ありがたいことに、いくつかの高校教科書に僕の日本語についての文章が載つて、あちこちの入試問題でも使われるようになりまして。おかげでこのところ、テレビや新聞の取材でお呼びがかかるのは、ほとんどが日本語の専門家としてですね。

そんなわけで大学でも、うちの理工学部と文学部ではフランス語、言

語学、メディア論を担当し、早稲田や法政では哲学、青学では記号論を教えて、専門のわからないヌエのよ

異文化カルチャーショック

竜案 フランスに行つて、いちばんカルチャーショックを感じられたのはどんなことですか。

加賀野井 そうすると、フランスに行つたことが大きなきっかけだと思いますか、幅を広げるきっかけになつたんでしょうか。

竜案 フランスの対日感情はどうなんですか。

加賀野井 わりといいです。とりわけ日本人と情緒的に通じ合うものがあります。アメリカ人はかなりドライで、未来しか見ていない。ところがフランス人は、昔親しくして

ふたたび出会つたりすると、しみじみ「懐かしいね」という感じになるような人たちで、感情もきめこまやかだし、見事な社交性もある。日本についても、ある種の人種差別とか、そういうものをほとんど持たない。そういう感じですよ。ですから、非常にいいと言えるでしょう。

ですから、迎えに来てくれるという友達の友達はおルリー空港に行き僕はシャルル・ド・ゴール空港に着いてしまつたわけです。そこでつかつかとカウンターに行つて、空港係員の女性に、「すみませんが、呼び出していただけませんか。ひよっとして友達がここに着ているかもしれ

ないので」と言うと、「呼び出しなんてことはしません。あなたが友達と約束したのは、個人の問題でしょう。あなたたちで解決してください」と、取りつく島もない。日本だといろいろな事柄をお上に頼つたり、ほかの人に頼んで何とかする場合が多いけれど、向こうの人間は「自分のことは自分でしろ」で終わりなんです。これが日本から初めて外に出たときのカルチャーショックでした。われわれが持つて生まれなかつたところのものだなどというのを痛感したのが、ショックの始まりです。まあ、その他、あらゆる事がカルチャーショックでしたけれど。

竜案 相当鍛えられますね。

加賀野井 鍛えられます。日本の場合だつたら以心伝心というか、こう言えば相手はこうわかつてくれるだろうというのがありますが、向こうは言わないことは存在しないみたいなものです。これはフランスに限らず、英米圏であつてもドイツ圏であつても、まったく同じことですよ。自己責任とひところの政府がよく言っていました。ああいうものは向こうで生活すれば当然のよ



絶対に相手にしてくれない。

竜楽 そうなんです。窓口は2人でやっていたんですが、ようやく3人目が来た。でも座って隣とずっと話をしている。「昨日、どうだった？」みたいな話でしょう。ああいうのを見て、ヨーロッパに行くのとストレスがたまるなという気がしました。

加賀野井 ありますね。ただ、あれに慣れると、またそれはそれでね。たとえば窓口でトラブルがあると

するでしょう。お釣りが違ってるとか何とか文句を言うときに長蛇の列になっていると、日本だったら後ろの人が気になって、この苦情申し立てをそのまま延々と続けることはできませんよね。フランスの場合には、おかしいと思ったことは、延々そこで相手と喧嘩していられるんです。そうすると後ろの人間は、「オー、ララ。しょうがないな」と言っただけの窓口に行く。後ろにいくら列ができてもしようがない、こういう

ことは彼らの問題であり、彼らの権利なんだから、待っているしかないなという感じになるんです。

だから逆にそちらに慣れてしまうと、日本のように白黒をはっきりさせないうちに、後ろが詰まっているから、もうこのあたりでやめておこうか、といった中途半端なことはなくて済むわけです。

だから、どちらがいいというわけではないんですが、本当に違うなと……。つまり日本に慣れるとフランスではストレスがたまるし、フランスに慣れると日本ではストレスがたまるという話です。

竜楽 あと、どんなことがありませんか。きりがいいんでしょうが。

加賀野井 日本に帰ってきて、いまだにしっくりしないのは、巷に音が多すぎることです。喧騒があまりにもあり過ぎて、みんな落ち着いてものを考えられず、右往左往、忙しそうに動いている。わいわい騒いでいる。それが活気と間違えているよくなところがありますね。

昨日も久しぶりにJR線で移動していたら、うるさくてしようがないんですね。1駅行くあいだに、まず、

「次は中野、中野です」と2度くり返して言われるでしょう。同じ車両の中に座っているのに、中野に着く直前、「まもなく中野、中野」とまた聞かされる。そして扉が開くと、プラットフォームから「中野、中野」と来るわけです。たった1駅のあいだに、どうして6回も「中野」を聞かされなければならないのか。

それから車掌さんが、電車が出てからさまざまアナウンスをしましよ。ね。そういう独特の日本的やさしさとか日本のサービスが、あるときちよつと裏返しになると、うるさくて、おせっかいで、高飛車で、ソフトな管理として感じられてくる。

竜楽 私たちもけっこう移動が多いものですから、休みたいというときに電車のスピーカーの真下にもいいようなものならしよがないんですよ。

加賀野井 そういうことです。

竜楽 あとは物売りの人もそうですね。あれはスピーカーを通していませんが、ウトウトとしたときに……。黙って通っても呼び止めて買うでしょう。寝ている人を確実に起こすような大きな声で言っただけ

うに身につけざるを得ない。

竜楽 私も初めてフランスに行ったときにド・ゴール空港だったんですが、やはり場所がわからなくて家内とうろろしていたら、そのときは親切な人から、「何をしているんですか。ここは違いますよ」と言われて初めて、その場所が目的と違うところだということに気がついたんです。それから急いで切符を買いに行ったんですが、すごい長蛇の列なんです。日本人だったら、あれだけ並んでいたら、人員に多少余裕があれば対処しようとするじゃないですか。それは全然なくて……。

加賀野井 そうですね。周りにいる係員たちは、暇そうにしているも

も行ったり来たりするというのは迷惑極まりないです。

加賀野井 そうですね。だから師匠のように忙しくて、どこかで一つパツと仕事をやっておいて次の場所に移動される。その間に少し仮眠をとりたいとか、そういう人たちのことを全然考えていないんです。世間の最大公約数みたいところで、みんなこうなんだから、あなたもそこで我慢なさいと、ひとしなみに言われてしまうわけです。

だから、わが国にいと、みんな平等で、仲良くて和を乱さない。これがいちばん大事なことであって、さまざまに違う人間がいるとか、さまざまに違う価値観があるとかいっ

たことへの想像力が働かない感じがします。

つなぐ国、日本

竜楽 日本の音のうるささということ言いますと、落語ですと物売りの声は当然あります。そういう肉声と機械を通した音の違いもあるのではないのでしょうか。

加賀野井 違いますね。だから、僕たちの親しい仲間が音に対する反対運動みたいなことをしているのは、基本的には拡声器の騒音なんです。目とは違って、耳はなかなか完全に閉じてしまうことはできないし、これでいつも社会とつながり合っているわけです。そこに傍若無人にいろいろな音を入れられると、気がつかないうちになかなりのストレスになつてしまっているだろうと思います。



電車の中とか商店街だけでなく、本来、日本では静けさが支配するべき公園とか海辺、ああいうところに行っても音楽が流れていた

り、迷子のお知らせがあったり、さまざまな音がありますよね。そうしたものが、先ほどから言う日本の和とか、みんな同じことをするとか、そういうことへ誘うものであって、個々みんな違う価値観を持って、違う時間帯で動いて、さまざまな生き方をしているということを認めなくさせる大本ではないかと思えます。

昔から物売りの声はあったというんですが、かつては肉声であり、それぞれ情緒があり、これほどにも音が蔓延していない段階だから、それ自体が意味のあるものとして聞こえたわけですが、今は町のなか全部に暗騒音としてかなりの音が流れているところへ、もっと大きい声でがなり立て合うわけですよ。これはやはり異常ではないかという感じがします。

竜楽 私のところも、区役所のお知らせがものすごく悠長な調子でかかってくるんです。初めはわからなくて、聞こえないから変だと思つて逆に気になつて外に出てみたら……。「ただいま、光化学スモッグが、出ておりますので外出はひかえてください」。そういうことはもつとはつきり言うか、いかにも緊急事態だと

いう調子で言つてもらいたいです。同じポリウムでも、おそらく機械を通した音と肉声は全然違うと思います。

加賀野井 違いますね。灯火管制下に置かれた戦時中みたいな、おそらくああいう雰囲気なのではないかと思えます。

竜楽 寄席で同じ斬をしていても、マイクひとつ通すのと肉声でやるのと、同じポリウムで聞こえてもリアリティがまったく違いますね。

加賀野井 昔、オペラで、アレーナ・デイ・ヴェローナというヴェローナの歌劇場のメンバーが日本にやってきたときに、マイクを通して歌うのを聴いたことがあるんですが、これは聴くに堪えないものでした。本国ではそんなことしないのにね。

竜楽 やはり機械のほうが体に触るといふか。

加賀野井 何かありますね。

竜楽 あるんでしょうね。あと、あれがいやですね。野球場。声ではありませんが、トランペットで応援という名の騒音を延々と続けている。あれは大リーグでは全然ないわけですよ。

加賀野井 われわれは雰囲気で動くみたいところがあって、たとえ美観でもそうでしょう。どこかの町に行っても、商店街があると、その横に七夕飾りみたいな花飾りみたいな、プラスチックでつくった変な飾りがワーツとくつついていたり、

のぼりから看板から極彩色のものがガチャガチャとある。ああいうのがにぎわいだと思うわれわれの思い込みがあるのではないかと思います。だから、音もうるさいほうがいい。いろいろなものがひしめきあっているほうがいい。西洋人が東洋的エキゾチシズムとして、香港などのお店の看板とか日本の猥雑ないろいろな張り紙を興味深く写真に撮って帰ります。ああいうのがわれわれの身に付いているのかもしれないけれども、「現代の日本の皆さん、本当にそんなのが快適でしょうか」と、僕などは聞いてみたいんです。

竜楽 感受性の扉みたいなのをどんどん閉ざすように社会が行っているという感じがしますよね。われわれの芸は言葉ひとつで想像するだけのもですが、今はすべてのこと

を説明して見せてくれるわけじゃないですか。

ですからそういう点で、昔以上にある種、技術がないとわかっていただけなのではないかという気がします。

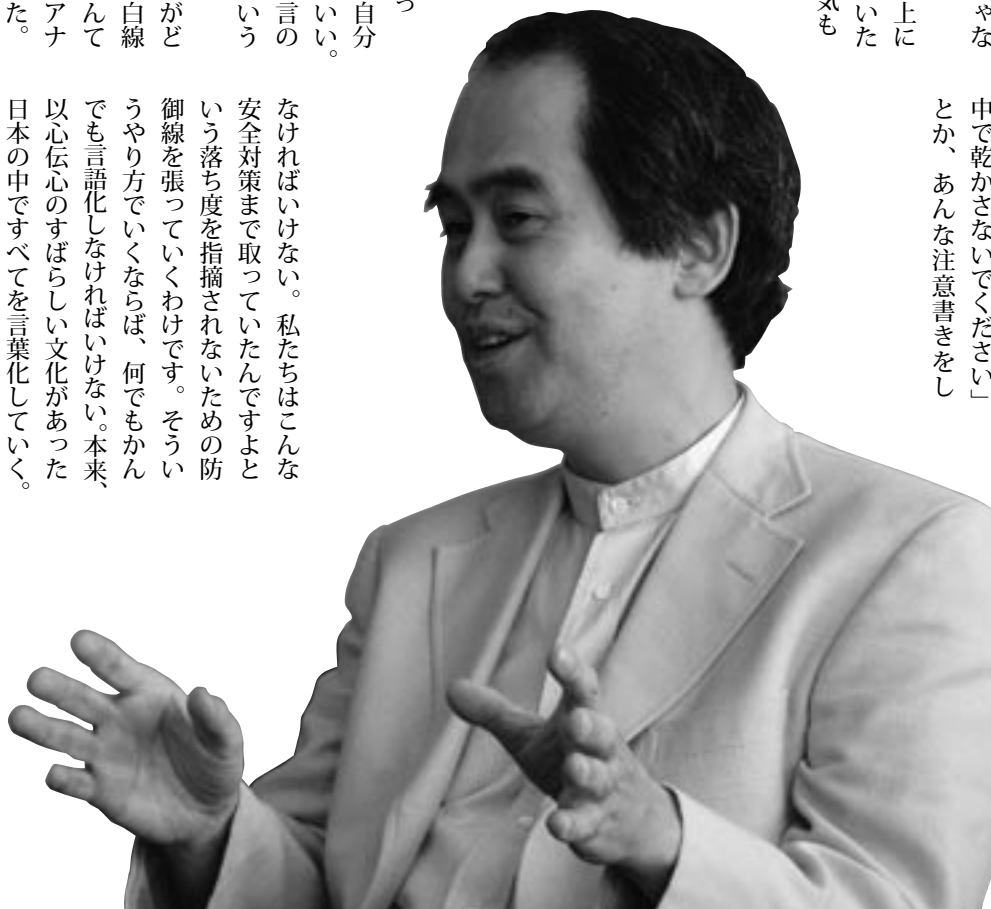
加賀野井 日本は昔から

以心伝心という文化ですね。本来、以心伝心というのは、一つの言葉の背後にかなりいろいろなものを読み取るという能力があったんですが、そうだとすれば、先ほど申し上げたようなアナウンスはほとんど要らないわけで、いま師匠がおっしゃったように、自分の目で、自分の感覚で、すべてを見ていけばいい。かつては、相手の人が言った一言の裏側に、一を聞いて十を知るといようなことができていた。

ところが日本人は、その能力がどんどん衰えていって、万事が「白線の内側までおさがり下さい」なんて幼稚園児にさすような言葉でアナウンスするようになってしまった。アメリカの悪い影響もあるんですけど、たとえば「猫を電子レンジの

中で乾かさないでください」とか、あんな注意書きをし

なければいけない。私たちはこんな安全対策まで取っていたんですよという落ち度を指摘されないための防線線を張っていくわけです。そういうやり方でいくならば、何でもかんでも言語化しなければいけない。本来、以心伝心のすばらしい文化があった日本の中ですべてを言葉化していく。ところが、まさしく今まで日本は以心伝心の文化でずっと来たもので





ういう人たちが目立って増えてきました。ビジュアルメディアとか、いろいろなものの中で動いているわけです。そうするとやはり筋道だったださまざまな事柄をやれなくなる。

いま日本の教育でいちばん問題になるものとして、よく数学や物理などのいわゆる理数系の力が弱まっていることがあげられます。僕たち理工学部では如実にそれを感じますが、それだけではなく、やはり言語能力という文系の能力の方も壊滅的です。おそらく日常のふつうのやりとりでは破たんをきたしてはいないから気づかれないだけのことであって、ひよっとしたら言語能力のほうも、もつとずつと大きなダメージを受けているのかもしれない。

竜楽 電車のアナウンスを全然聞いていないという話で思い出したんです。山手線に乗っていたら、隣の人がある師匠に、「いま上野ですか」と聞いたんです。「はい」と言ったら、「大変だ」と表に飛び出したんですが、言われた落語家は、「上野の寄席に出ていますか」と……。

加賀野井 なるほど(笑)。鈴木とか本牧とかね。

竜楽 「いま浅草の出演？」とか「新宿の出演？」という感じで、「いま上野ですか」と聞かれたと思って「そうです」と言ったら、「大変だ」と……(笑)。そういうのがあったらしいです。実際、二つ三つ乗り越してしまったりするのは、あれだけ放送してありますしね。

加賀野井 それに日本では、自動販売機とか機械がしゃべるでしょう。自動車も「バックします。バックします」とか。以前、市役所のゴミ収集課に、収集車のああいふ音を全部消せないかと提案した

ら、「安全対策のためにそうはいかない」と言うんです。安全対策のためめと言いながら、ときどきは「バックします」をかけていないときもあって、そのときは対策を怠っているという話になるんでしょうかね。

津々浦々でそういううるさい音が垂れ流されている一方で、人は何もしゃべらなくなるという状況が、わが社会の中で、いちばんはつきり現われてきています。すべてこういうふうな便利ツールと、人と人との身の関係をこえた要らぬ機械音が蔓延していることによって無言化社会ができていくということではないでしょうか。

現代を取りまく「人」環境

竜楽 あと、われわれの嘶の中から言うと、家族の規模がどんどん小さくなっちゃったのと、界限というか町内みたいなものが破壊されてしまった。よく言いますが、銭湯に行くところのさいおやじがいて、理不尽なことでも怒られたもんです。今は怒り慣れてもないし、怒られ慣れてもないんですね。

上下関係も親と子供しかいません

から、上に気を使うとか、そういうことがなくなってしまうんですね。

加賀野井 かつては落語の大家さんと店子みたいな関係で、小言幸兵衛のじいさんが必ず町内にはいた。ああいふ存在がいなくなると疑心暗鬼の社会になってしまう。お互いがストレスをためながら疑心暗鬼でいるわけですから、怪しい人を見かけたら警察に通報してくださいという社会になってしまいうわけです。

竜楽 先生のご本(『うるさい日本』)を哲学する——偏食哲学者と美食哲学者の対話「講談社」にもありましたが、言い方がいやだとか、言っていることよりも、相手が醸し出す雰囲気拒否するとか、いやがられることがすごくありますね。

私なども、いろいろ言ったりしなければならぬときに、言葉の順序をどういうふうに行って、最後に柔らかな雰囲気が終わるかとか、そつちのことに気を使わなければならぬ。これはもともと日本人的なものでもあるんですかね。

加賀野井 そうですね。ただ昔の日本だったら、こつちが言いたいこ



とをある程度向こうもわかってくれる。たとえば今みたいな苦情を出そうとしたときも、あまり多くを言わないでもお互いがわかり合えた。ところが今はそういう察知の感覚もなく、自分たちの生き方に文句を付けられたみたいになんか硬化してしまふ。

そんなふうになると、柔らかく出るとか何とかよりも、理屈をまず通して、「こうでこうでこうだから、やめてもらいたい」と言わなければなりませんね。そうすると柔らかくやれない部分が出てくる。ですから時代のせいなのか何なのか。本来、以心伝心に近いような感じで、スツスツとわかり合うのが日本人としてのよさだったと思うんですが、

それもできずに説得力もなくなる。そうだとすると、これからはきつちり、理路整然と話して、それでいやだと思われる人には、いやがられてもしようがないなという覚悟をきめなければなりませんね。

竜楽 町から音を全部なくせば、本来日本人が持っていた感性は戻ってきますか。

加賀野井 音を全部なくせばという一つの仮定がなかなか成り立たないだろうと思いますが、全体としての騒音が少なくなったら、みんなあまり叫ばなくていいわけですからね。肉声も復権してくるでしょうし……。ところで噺家の世界、特に新しく入門してくる人たち（の感性）はどうですか。

竜楽 判断力がないですね。突発的なことが起きたときに、どうしたらいいかわからない。高座にのぼる前に熱いお茶を持ってきたので、「これ、熱くて飲めない」と言ったら、「すみません」と言って水を入れてきた

（笑）。そういうことが平気で……。このあいだもちよつと朝日新聞に書きましたけれども、インターネットで入門してくるのがいますからね。話すのが苦手なんです（笑）。それでなぜ噺家になるのかわからないんです。

る言葉だけを使って、みんながお互いにその中で居心地のいい場所をつくっている。確かに日本語は人間関係のさまざまなニュアンスをもった言葉を使い分けなければいけないから、すばらしく繊細で妙味のある言葉であると同時に、それだけ難しくやっかいな言葉ですけれど……。

竜楽 大人ということでは、

竜楽 こつちが話しかけてほしいときは話しかけないで、ほうっておいてもらいたいときに話しかける。KYじゃないですが、微妙な空気を読むことが鍛えられていないんです。

日本語の妙味を知り、きちんとしたコミュニケーションができる人は大人ということになりますね。

同世代の人としか付き合っていないから、上下の接し方とか、そういうものも学んでいないですし、打ち上げの会場に行つてだれとも話さない。

加賀野井 そういうことです。だからこれから大事なものは、若い人も日本語に習熟することですね。寄席に行つたときに、さりげないさまざまな表現が妙味として感じられるぐらいの能力をつけてくれれば、おそらく学校教育はかなり改善されるだろうと思います。

加賀野井 どんどん社会が小さくなつていきますよね。日本人はタコツボ的だと昔からよく言われますが、タコツボに入る度合いが最近はどうどん強くなってきていて、若者も年代ごとにそれぞれが固まつてしまつて、本当にみんなタコツボの中に入つていつているのではないかという感じ。その中で自分たちに通用す

もちろん教師の側の工夫も必要でしょうが、生徒さんの方にも、教師の言わんとするある種の意図がわかるためにはかなりの語感が必要であつて、やはり大事なのは言語教育ということになる。社会にひどく無神経に垂れ流されている言葉もかな

りおさえて、聞いていても右から左へ聞き流してしまうことをやめて、言葉をもっと大事なものととしてとらえる喧騒のない環境にして、生身の言葉で通じ合うような社会をつくり上げる。

そうだとすると、嘶家という師匠のようなお仕事は、われわれ教師にとつても実はかなりありがたい職業であつて、そういう言葉の妙味を、生徒たちに伝えていただくことができるわけですね。

竜案 本当に通じないことがどんどん増えてきている。ただ落語は今まではみんな口伝えですから、通じないものは捨てて、自然に新しく言葉を変えてきていた。最近はその本とかテープもあります、これがわからなかつたら、もう嘶が成り立たないとか、そういうものが出てきてしまつているんです。

加賀野井 僕たちも授業で、このレベルの事柄が通じなくなつたら、もうおしまい。教壇に立つこと自体あまり意味がないかもしれない、というように無力感を感じさせられる場合がときどき出てくるようになります。

師匠たちが、ある種の笑いを狙つてみても、客席の反応が、「なんだ、これは」という感じのときが出てくるわけでしょう。ちよつと似たようなところかもしれない。

竜案 昔は「惜しいかな、洒落のわからぬ男にて」というのがあつて、志ん生師匠がよくやつていました。要するに洒落のわからない人。「洒落つて何だい」と言うから、「何か題を出してください。そうしたら洒落ますから」「踏み台か」「そうじゃなくて、何か言つてください」「じゃ、衝立でどうだ。そうしたら」「ついでにじゅうごにち（1日、15日）つてのはどうでしょう」と（笑）。「何だ、それ」「洒落だよ」「それがなんで洒落なんだよ」「いや、似ているところが洒落です」「ふうん。じゃ、おれとせがれで洒落か」（笑）。そういうようなやりとりがずっと続くん

です。

加賀野井 ちよつとずつずらしていつてね。

竜案 でも、洒落がわかる人ばかりだから、わからない人が笑いの対象になつていたんですが、そんな人が増えてくる……。実際、そうい

うことが最近よくあります。「似ているから、なんでもおもしろいんだ」と言われたら、日本の笑いの7、8割方はなくなつてしましますから。そういう時代ですよ。

言葉もそうなんです、自分で火を起こすとか、暖を取つたり、湯をわかすとか、冬はくつついてないと過ごせないとか、夏は暑いからあまり働かないとか、そういうことがわからなくなつてくると、言葉以上にできない嘶ばかりです。

加賀野井 そういうことです。「縁側で浴衣がけ」なんて言つても今の小学生は知りませんから、「縁側つて何だ」と逆に質問されたりする。仕方がないから「屋根があつて、下の板の部分が張り出していて」と説明すると、最後に子供が、「ああ、わかつた、ベランダだ」（笑）。そんな社会になつてしまつていきますよ。

竜案 寒さ、暑さ、痛さとか、そういうものが生身で感じられなくなつてくると、嘶の多くの部分が失われます。「火焰太鼓」という嘶には、「半鐘を鳴らすんだ。いや、半鐘はいけないよ。おじちゃんになるかもしれない」と出てくる。ただ今は「半

鐘」もわからないし、「おじちゃん」もわからない。

加賀野井 われわれも授業で、「えっ？」と思うようなことがたくさんあります。四字の熟語なんかかわからない。ずいぶん昔になります。「その答えはちよつと隔靴搔痒だね」と使つたことがあります。靴の上から足を搔いて、痒いのに手が届かないという感じですね。でも、学生さんはキョトンとするばかり。その時以来、僕はつとめて四字熟語を使わないようにしています。

同じようなことですが、この前テストで、「携帯電話の功罪について述べよ」という出題をしたんです。そうしたら、監督で教室を回っているあいだに学生さんが手を挙げて、「これ、何ていう意味ですか」と聞くんなんです。功罪について述べよ。「つまり、いいところと悪いところということです」とやつていたら、その学生が「わかつた、メリットとデメリットですね」（笑）。「当たり前、当たり前」という話です。そういうところがどんどん変わってきていて、言語感覚は本当に違つてきています。

竜楽 カタカナ語とか外来語的なもののほうがニュアンスを伝えるということですね。

よく学び、よく遊ぶ

竜楽 話は尽きませんが最後に今後の中央大学や中大生に望むことをお願いします。

加賀野井 今大学は、非常にいい大学と、そうでない大学というか、そこにどんだん二極分化している時代だと思っています。たしかウオルフレンが言っていました。東大や京大は完全エリート校になって、カオスの中を泳ぎ切ることでできる人物を養成する。中大やその他の大学の出身者は専門化されたテクノクラートになって、そうしたエリートたちにあごで使われるのではないかと、というひどく露骨な見通しまで出されています。いやな見解ですが、避けて通るわけにもいきません。

そこでぼくは、あえて、中大生はそんな境遇に甘んじることになってもいいのか、と問いたい。4年間の猶予期間をレジャーランドで過ごし、せいぜいでも専門バカにとどまろうとするのかどうか、そこをはっきり

とみんなに問いたいんです。面白おかしい毎日をおくるだけなのか。いろいろな教養をなくして自分の専門ばかりをどんだんやっていって、単なる高級テクノクラートとしての専門家になっていくのか。それとも、もう少し教養を積んで、さらに高度な楽しみを身につけて、世の中もいろいろ見て、それこそ寄席で大いに笑えるような人になって、自分の専門をもやっていけるような幅広さを身に付けていくのか。その選択のところに、われわれは置かれていると思います。

僕自身、物事をできるだけ楽しみたい人間ですし、師匠のようにそれを本当にプロとしてやっていらっしゃる方もいる。僕は後輩たちには、寄席のおもしろさがちゃんとわかる、そして日本の今の無言化社会というものの中で、きちんと言葉も使えて、多様な文化や他者のことも理解できて、というような幅広い教養人になっていってほしいと思います。月並みなことですけれど、よく遊び、よく学べということでしょうかね。

もつとも、この「遊び」には注意が肝心。「飲み」「ゲーム」「テレビ」

「ケータイ」なんていうようなものに時間をとられすぎないことが大切ですが、世界にはもつとおもしろいところから。山ほどころがっているわけですから。

そこで、われわれの役割は何かというと、大学間の競争があるから、専門的なところだけを伸ばして中大の売りにすればいいといった教育の仕方ではなく、一般教養科目や語学などにも工夫を施して、幅広く、そしてさまざまなものが楽しめるような大学生をつくるシステムを模索しなければならぬということになるでしょう。

竜楽 われわれはどちらかというととちやちやらした仕事ですが、昔から言われているのは、3年間は必死でけいこしろ。あとは遊べと言っています。遊べというのは、酒をただ飲んでやっているわけではなくて、いろいろなことを幅広く身につけるということなんです。

加賀野井 われわれが共通に言えることは、中大生の皆さん、遊びましょう(笑)。

竜楽 そうですね。どうもありがとうございました。

〈対談を終えて〉

加賀野井先生があまりに落語に詳しいのびびり。対談数日後に行なつた独演会にまでおいでいたたき恐縮いたしました。

マイクを通した声と肉声はまるで違うというお話がありました。我々落語家にとつて一番身近で嬉しい肉声はお客様の笑い声ですね。もつとも毎度頂戴できるとは限らないのが悩みのタネ……。桑屋川柳に「嘶家は笑わせるまでまんざ泣き」という名作もあります。

先日の落語会。私が熱演しているまん前で和服を召されたご婦人がハシカチで口をおまえりて笑いをこらえている様子……。嘶を中断して高座から声をかけました。

「お客様遠慮なく声を出してください。」

その方が顔をあげてひと言。「気持ちが悪いです」

